研究ノート

スタインベック文学事典への試み

杉　山　隆　彦

ジョン・スタインベックについての研究は，アメリカでの先駆的な業績[1]に続いて，わが国でも近年，世界最初の全集が刊行を見[2]，また未収録短篇が発掘されて出版される[3]など，活発な状況を呈している。

このような現況を踏まえて，日本スタインベック協会では，専門研究者のみならず一般のスタインベック読者をも対象に，この作家についての基本的な情報を1冊に集めて便宜を提供しようという気運が出てきている。これには国際スタインベック協会々長のテツマロ・ハヤシ (Tetsumaro Hayashi) が厖大な原稿を用意して，全面的に参加してくれることになっており，これに日本スタインベック協会々員の衆知を集めて取り組むことを，私たちは考えている。

スタインベック没後20年を記念してという意味では必ずしもないのだが，今年はたまたまその年に当たるので，これを機会に，更に次の発展を目指して基礎を固めようという狙いがそこにはあるのである。辞典[4]となるのか，事典になるのか，あるいは便覧，入門書となるのか，今は未だ定かではないが，作中の人物名・動植物名・地名，スタインベック(文学)に深い関連のある人名・地名，時代的背景，スタインベック文学のキーワード，スタインベック・カントリーの図版・写真，更にはスタインベックの英文の抜粋――一般読者のために日本語訳をつけて――等を盛り込んで，十分な情報を提供したいと考えている。

扱う項目はかなりの数（2,000項目を超えるのではないか）にのぼると

考えられるので，本ノート（53項目）はその極く一部に過ぎないが，準備段階にある現在，大方の批判とご教示を得たいので，作業中のノートとして発表することとした。

注）

1) Jackson J. Benson, *The True Adventures of John Steinbeck, Writer* (New York: The Viking Press, 1984).

Robert DeMott, *Steinbeck's Reading: A Catalogue of Books Owned and Borrowed* (New York: Garland Publishing, 1984).

その他。

2) Yasuo Hashiguchi, ed., *The Complete Works of John Steinbeck*, 20 vols.（京都：臨川書店，1985).

3) Kiyoshi Nakayama, ed., *Uncollected Stories of John Steinbeck*（東京：南雲堂，1986).

4) 作中人物（動物を含む）のみを扱った辞典として，Tetsumaro Hayashi, ed., *John Steinbeck: A Dictionary of his Fictional Characters* (Metuchen, N. J.: The Scarecrow Press, 1976) がある。

（付記．この研究ノートは，1986年度および1987年度の成城大学特別共同研究助成による研究成果の一部である）

I．作中人物（動植物も含む）

Chitling, Willie: ウィリ・チトリング。映画制作者。シャルル・マルテル (Charles Martel) の店の得意客。パーム・スプリングスの家に，ビエィユキュロット城 (the Château Vieilleculotte) の礼拝堂から調度品や聖餐台を買ってきて，豪華なホーム・バーを作る。(*SRP*)

Hamadryad: ハマドライアッド。ギリシア神話の中で，樹木と共に生き，かつ死んでゆく木の精。(*TGU*)

Héristal, Clotilde: クロチルド・エリスタル。ピピン・アルヌルフ・エリスタル (Pippin Arnulf Héristal) 夫妻の娘。20歳。15歳の時，『さらば，わが人生』(*Adieu Ma Vie*) という小説を発表し，16歳で共産党に入り，20歳前に女優となって，『戦争と平和』(*War and Peace*)，『クォ・バディス』(*Quo Vadis*) に出演するような早熟でしたたかな娘。しかし，アメリカの大商人の息子トッド・ジョンソン (Tod Johnson) と恋をして素直さを取り戻す。父ピピンが王位を退くと，恋人と一緒にハリウッドへ行き，再び女優を目指す。(*SRP*)

———, **Marie**: マリー・エリスタル。ピピン・アルヌルフ・エリスタル (Pippin Arnulf Héristal) の妻，肥っていて陽気。夫と娘のために家を守る。経済観念が豊か。夫を尊敬しているが，彼がフランス国王になってからは，ベルサイユ宮殿での莫大な出費を伴う贅沢な生活に落ち着かない気持を抱く。その気持を幼な馴染みのシュザンヌ・レスコー (Suzanne Lescault)（いまはイアサント尼 (Sister Hyacinthe) となっている）との談笑にまぎらしている。夫の大失態を見てすぐに元の家に帰り，以前のような有能な主婦として家を守る。(*SRP*)

———, **Pippin Arnulf**: ピピン・アルヌルフ・エリスタル。アマチュア天文学者。54歳。パリ市マリニ街1番地に妻マリー，娘クロチルド

と住む。つつましい生活の中で，時々，天文観察用の器具を求めて濫費することがある。1951年には新しい彗星（のちエリゼ彗星と命名）を発見して表彰される。ふとしたことからフランス国王（ピピン四世）に祭りあげられるが，国会の開会式で大失態を演じて，彼の政府は倒れ，君主制は崩壊する。彼はマリニ街1番地の家へ逃げるように帰って行く。(*SRP*)

Juggernaut: ジャガノート。インド神話で，いかなる者も抵抗することの出来ない〈不可抗力〉の化身。(*TGU*)

Lescault, Suzanne: シュザンヌ・レスコー。マリー・エリスタル(Marie Hériстal) の幼な馴染み。美人で，生まれつき声が良く，踊り子としての適性を持っていた。父親が自殺して，やむなく舞台に立つようになったが，無理がたたって身体をこわし，尼僧 (Sister Hyacinthe) となる。マリーが国王夫人としてベルサイユ宮殿に入ると，彼女の相談相手となり，国内問題等で意見を述べ，間接的にフランスの平和と安全に寄与することになる。ピピン四世を尊敬し，彼の王位転落後も，短い治世だったが勇気と知性を発揮したとして彼を褒め讃える。(*SRP*)

Martel, Charles: シャルル・マルテル。ピピン・アルヌルフ・エリスタル (Pippin Arnulf Héristal) の伯父。画廊兼骨董店を営む。60歳台後半。穏やかな人物だが，身なり・態度にやかましい。画廊の奥に秘密の小部屋があり，そこで若い女性をもてなしたりする。甥のピピンが国王に仕立てられたのは政治的陰謀だと考え，一時世間から身を引くが，金持の息子トッド・ジョンソン (Tod Johnson) に贋物の絵を売りつけようとして，画廊の仕事は続けている。ピピンに対しては，政治に身を入れてもろくなことにはならないと忠告するが，ピピンが聞き入れないので，彼はアメリカへ行ってしまう。ピピンの王位転落の際，彼はマリー (Marie Héristal) とクロチルド (Clotilde Héristal) を救い出して，伯父としての務めを果たし，その後独りでポルトガルへ行く。(*SRP*)

Methuselah: メトセラ。旧約・創世紀5章27節に出てくる人物。969歳まで生きたといわれる長寿のシンボル。(*TGU*)

Python: パイソン (又はピュートン)。ギリシア神話の怪獣で，大洪水の泥土から生まれ，パルナソス山の洞穴に棲む大蛇。ギリシア神アポロ (Apollo) がデルファイ (Delphi) の神殿で退治した。(*TGU*)

II. スタインベック関連人物

Berry, Anthony J.: アンソニー・J・ベリー。ウェスタン・フライァー号 (the *Western Flyer*) の船主。これは漁船であるが，スタインベックが2,500ドルでチャーターして，1940年3月11日から4月20日までの6週間，コルテスの海 (Sea of Cortez) すなわちカリフォルニア湾 (the Gulf of California) への，海洋無脊椎動物採集の船旅に出かける。アンソニー・J・ベリーが船長。

Calvin, Jack: ジャック・カルビン。スタンフォード大学(Stanford University) 出身の生物学者。リッチー・ラブジョイ (Richie Lovejoy) を教える。同時に，児童物語作家，写真家，挿絵画家としても知られる。カーメル (Carmel) に住む。1930年10月にスタインベックがリケッツ (Edward F. Ricketts) に初めて会ったのは，このカルビンの家であったらしい。スタインベックの若い頃からの知人で親しい交流もあったが，スタインベックがリケッツの思想を，勝手に自分の考えとして利用しているとして，厳しく批判している。リケッツと共著で『太平洋の潮のはざまで』(*Between Pacific Tides*, 1939) の著者。海洋生物の生態を〈生態学〉的に忠実に描いたものとして，高く評価されている。この本の改訂版(1948)にスタインベックが〈まえがき〉を書いている。

Campbell, Joseph: ジョセフ・キャンベル。ニューヨークに生まれ，コ

ロンビア大学(Columbia University), パリ大学(Université de Paris), ミュンヘン大学 (Universität München) で学んだ神話学者。スタインベックが『知られざる神に』(*To a God Unknown*, 1933) を執筆していた頃, リケッツ (Edward F. Ricketts) の家の隣りの家に間借りしていて, 3人の交友が始まる。『知られざる神に』に大きな影響を与えたが, スタインベックがあまりにも生まのかたちで彼の神話学を援用しすぎるのを注意した。彼の神話学の全貌は, 代表的著作『千の顔を持つ英雄』(*The Hero with a Thousand Faces*, 1949) の中に示されている。

Colletto, Ratzi "Tiny": ラッツィー(タイニー)コレット。コルテスの海 (Sea of Cortez) への海洋無脊椎動物採集の船旅に日当めあての甲板員としてスタインベックに同行。5フィート2インチの小男("Tiny")だが, もとボクサー。船旅の途中, メキシコ西岸のグァイマス (Guaymas) で土地のチャンピオン・ボクサーと殴り合って, 打ちのめされる。

Enea, Horace "Sparky": ホーレス (スパーキー) イーニア。コルテスの海 (Sea of Cortez) への海洋無脊椎動物採集の船旅に, ウェスタン・フライァー号 (the *Western Flyer*) の甲板員兼コックとしてスタインベックに同行。イタリー系の陽気な男。のち, アンソニー・ベリー (Anthony J. Berry) の妹と結婚して, ベリーと義兄弟になる。

Graham, Ellwood: エルウッド・グレアム。画家。無名時代にスタインベックからさまざまな援助を受ける。スタインベックは自分の肖像画などには興味は無かったが, 彼を経済的に助けるために, 折りをみて自由に描かせていた。モンテレイのロボス通り653番地 (653 Lobos Street, Monterey) にあったグレアムのアトリエで, 肖像画を描かせながら, スタインベックは『コルテスの海航海日誌』(*The Log from the Sea of Cortez*, 1951) の一部を執筆している。ロボス通りはハックルベリの丘〉(Huckleberry Hill) と呼ばれて, 1930年代の後半から

1940年代にかけて，多くの芸術家が集まっていた。また，この地域が『トーティヤ台地』(*Tortilla Flat*, 1935) の舞台になっていると，スタインベック自身が言っている。

Gregory, Susan: スーザン・グレゴリー。モンテレイ (Monterey) に住んでいた小学校教師。スタインベックにパイサノ達 (paisanos) のエピソードを話してやり，それが『トーティヤ台地』(*Tortilla Flat*, 1935) に結実した。『トーティヤ台地』の1947年版には〈モンテレイのスーザン・グレゴリーに捧げる〉(To Susan Gregory of Monterey) という献辞が刻まれている。

Ingels, Beth: ベス・インゲルス。コラール・デ・ティエラ (Corral de Tierra) に住む。新聞発行，広告業に携わる。スタインベックにシャーウッド・アンダスン (Sherwood Anderson, 1876-1941) の『オハイオ州ワインズバーグ』(*Winesburg, Ohio*, 1919) の存在を紹介し，『天の牧場』(*The Pastures of Heaven*, 1932) 創作のヒントを与えた。

Jeffers, John Robinson: ジョン・ロビンソン・ジェファーズ (1887. 1. 10-1962. 1. 20)。アメリカの詩人。青年期以降，カリフォルニア州カーメル (Carmel, California) に定住して詩作に没頭した。スタインベックはリケッツ (Edward F. Ricketts) を介して彼を知り，彼の詩から大きな影響を受けた。スタインベックが深く尊敬していた数少ない同時代の詩人のひとりである。特に，長詩「葦毛の馬」("Roan Stallion," 1925) はスタインベックの文学思想に甚大な影響を与えた。その影響はとりわけ，『勝敗のわからない戦い』(*In Dubious Battle*, 1936) の主人公のひとりジム (Jim Nolan) および，『怒りのぶどう』(*The Grapes of Wrath*, 1939) の主人公トム (Tom Joad) の人物造型の方法に認められる。

ジェファーズは第一次世界大戦の頃，カーメルのオーシャン・ビュー通りに自分で家を建て (26304 Ocean View Avenue, Carmel)，そ

こに住み着いた。石造りのその家は「トー・ハウス」(Tor House) として名所のひとつとなっている。

Mirrielees, Edith Ronald: イーディス・ロナルド・ミリリーズ。スタンフォード大学 (Stanford University) 時代のスタインベックに絶大な影響を与えた恩師。短篇小説の授業で，「作家の方法はサーチライトではなく，スポットライトでなくてはならない」と教えている。スタインベックの第2作『天の牧場』(*The Pastures of Heaven*, 1932) は，この教えを忠実に守って書かれたと言われている。彼女自身，『アトランティック・マンスリ』(*The Atlantic Monthly*) (月刊文芸雑誌) 等に短篇を発表している。

Ricketts, Edward F(landers).: エドワード・F・リケッツ (1897.5.14–1948.5.11)。スタインベックの親友であり，文学上の師。シカゴの敬虔なエピスコパル教会員 (Episcopalian) の息子として生まれる。伯父の感化で生物学に興味を持ち，イリノイ州立教育大学 (Illinois State Normal University) で動物学を学ぶ。いくつかの職業を経て，シカゴ大学 (the University of Chicago) に入り，生物学を専攻したが1922年に中退して，翌1923年に西海岸へ来て，1930年にスタインベックと出会う。モンテレイ (Monterey) の缶詰横町 (Cannery Row) に太平洋生物学研究所 (Pacific Biological Laboratory) を経営する。1939年からはスタインベックも，この研究所の共同経営者となる。スタインベックの世界観，とりわけ生物学的なものの見方に大きな影響を与え，ひいては彼の文学に決定的な方向づけをした。全体論 (Holism)，非目的論思考 (Non-teleological thinking)，集団人 (Groupman)，方陣の理論 (Phalanx) などはみな，リケッツの影響と言ってよい。また，『天の牧場』(*The Pastures of Heaven*, 1932) から『たのしい木曜日』(*Sweet Thursday*, 1954) にいたるほとんど全ての作品に，彼の影響が見られ，特に次の諸作品では，重要な登場人物のモデルとなっている。

『勝敗のわからない戦い』(*In Dubious Battle*, 1936)——ドック・バートン (Doc Burton)。

「蛇」("The Snake," 1938)——ドクター・フィリップス (Dr. Phillips)。

『月は沈みぬ』(*The Moon Is Down*, 1942)——ドクター・ウィンター (Doctor Winter)。

『缶詰横町』(*Cannery Row*, 1945) ——ドック (Doc)。

『らんらんと燃える』(*Burning Bright*, 1950)——友人エド (Friend Ed)。

『たのしい木曜日』(*Sweet Thursday*, 1954)——ドック (Doc)。

また,スタインベックは,『コルテスの海航海日誌』(*The Log from the Sea of Cortez*, 1951) では,その巻頭に「エド・リケッツのこと」("About Ed Ricketts") という長文のエッセーを掲げ,その中で,18年間におよぶ2人の交友を語り,興味あるエピソードをいろいろ紹介しながら,尊敬の念をこめてリケッツの愛すべき人間像を浮き彫りにしている。リケッツは1948年5月7日,自分の運転するくるま(おんぼろのパッカード)がサンフランシスコからやって来たデル・モンテ行き急行 (the Del Monte Express) の列車に衝突して,4日後に死亡。彼の最期の言葉は「機関士を責めるなよ」("Don't blame the motorman.") だった。数多い遺稿は,ジョエル・ヘッジペス (Joel W. Hedgpeth) によって編集され,1978年に『外海の島々』2巻 (*The Outer Shores*, 2 vols.) に収められている。

Steinbeck, Carol Janella Henning: キャロル・ジャネラ・ヘニング・スタインベック。スタインベックの最初の妻。サンノゼ (San Jose) の出身。父は銀行員。スタインベックが1926年当時働いていたタホ湖 (Lake Tahoe) の養鱒場へたまたま見学に行って知り合い,1930年1月に結婚した。1943年に離婚。2人の間に子供は無い。スタインベックの無名時代には,タイピストの仕事をしながら彼を支えた。離婚後,ウィリアム・ブラウン (William Brown) と結婚し,モンテレイ

(Monterey) 近郊のカーメル (Carmel) に永住，赤十字病院に勤務した。1983年没。享年76歳。

————, **Elaine Anderson Scott**: イレーヌ・アンダスン・スコット・スタインベック。スタインベックの3番目（最後）の妻。もと女優。『たのしい木曜日』(*Sweet Thursday*, 1954) のミュージカル『パイプ・ドリーム』(*Pipe Dream*, 1955) の製作者・映画俳優ザカリー・スコット (Zachary Scott) と離婚して，1950年にスタインベックと結婚。スタインベックの死後，ロバート・ウォルステン (Robert Wallsten) と共著で，『スタインベック書簡集』(*Steinbeck : A Life in Letters*, 1975) を編集・出版する。

————, **Gwyndolen Conger**: グウィンドーレン・コンガー・スタインベック。スタインベックの2番目の妻。キャロル (Carol) との離婚成立後10日ほどで結婚。以後スタインベックはニューヨークに定住する。2人の間には Thom と John Ⅳ の2人の息子がいる。1948年に離婚。

Street, Webster F.: ウェブスター・F・ストリート。スタインベックのスタンフォード大学 (Stanford University) 在学中から死に至るまでの親友。モンテレイ (Monterey) で弁護士を開業。トービー ("Toby") の愛称で知られる。（この愛称は，『トリストラム・シャンディ』(Laurence Sterne, *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*, 1760-67) の中の，主人公トリストラムの叔父で，伊達男の退役陸軍大尉に由来する。）

ストリートは，スタインベックとキャロルの離婚訴訟の仲介役をつとめた。

スタインベックとの出会いは，1923年，スタンフォードの英語クラブでだった。このクラブは詩の朗読や，各自の持ち寄る作品の発表をしたりする文学サークルで，当時ここで話題になった作家は，サロイァン (William Saroyan, 1908-81)，キャベル (James Branch Cabell, 1879-1958)，ドス・パソス (John Dos Passos, 1896-1970)，アンダス

ン (Sherwood Anderson, 1876-1941), ウォートン(Edith Wharton, 1862-1937), シンクレア・ルイス(Harry Sinclair Lewis, 1885-1951) 等で，スタインベックとほぼ同時代を形成する新進作家群であった。あまり大学の教室に出ないで，6年間も籍を置きながら，結局は卒業しなかったスタインベックも，この当時から作家を目指して模索していたことがわかる。

ストリートはスタンフォード卒業後，劇作家を目指して2，3の作品を書いてはいたが，弁護士を開業してからは，業務が多忙となり，劇作家を断念した。

Travis, Hall "Tex": ホール (テックス) トレィビス。コルテスの海 (Sea of Cortez) への海洋無脊椎動物採集の船旅でスタインベックに同行。機関士を務める。テキサス (Texas) 生まれ。同行したリケッツ (Edward F. Ricketts) を，スタンフォード大学 (Stanford University) を首になった大学教授と思いこんでいた。

Ⅲ. スタインベック文学関連人物

McWilliams, Carey: ケァリ・マクウィリアムズ。1930年代，カリフォルニア移民・住宅局長 (Commissioner of Immigration and Housing for the State of California) として，不況の時代のカリフォルニアで実務に携わり，その豊富な経験をもとに，名著『農業工場』(*Factories in the Field*, 1940) を発表する。これは『怒りのぶどう』(*The Grapes of Wrath*, 1939) が剔抉した30年代のカリフォルニア，ひいてはアメリカ全体の抱えていた状況を側面から照らし出しているものとして，きわめて貴重な文献となっている。第1章には次の1文がある。

The exploitation of farm labor in California, which is one of

the ugliest chapters in the history of American industry, is as old as the system of land ownership of which it is a part.

（訳）

カリフォルニアの農業労働の収奪は，アメリカ産業の歴史の中でもっとも醜悪な一章となっているが，それは，それを生み出した土地所有の形態と同じ歴史を歩んでいるのである。

マクウィリアムズは『農業工場』のほか，『カリフォルニア革命』(*The California Revolution*, 1968) 等，社会経済学関係の著作を多く発表している。1970年代には，週刊評論誌『ネイション』(*The Nation*) の編集長を務めている。

IV. 作中の地名

Nuestra Senõra: ヌエストラ・セニョーラ（スペイン語で〈われらの女性〉を意味し，そこから「聖母」(Our Lady the Virgin) を表わす)。『知られざる神に』(*To a God Unknown*, 1933) の舞台で，主人公ジョセフ・ウェィン (Joseph Wayne) が開拓したカリフォルニア中部の農場。スタインベックはカリフォルニア中部のホロン (Jolon) をこれのモデルとしているが，実際には，ウェブスター・ストリート (Webster F. Street) と訪れたことのある，カリフォルニア北部のレイトンビル (Laytonville) 近郊の田園を頭に入れて描いている。(*TGU*)

Torgas Valley: トーガス盆地。『勝敗のわからない戦い』(*In Dubious Battle*, 1936) の中で，移住労働者のストライキが行われるりんご園のある盆地。(*IDB*)

V. スタインベック（文学）関連の地名

Corral de Tierra: コラル・デ・ティエラ（スペイン語で〈囲われた土地〉という意味）。モンテレイ（Monterey）から国道68号線を12マイルほど北上（サリーナス（Salinas）からは同じく国道68号線を8マイルほど南下）したところの土地。なだらかな丘陵地帯で，『天の牧場』（*The Pastures of Heaven*, 1932）の舞台。

Fremont Peak: フレモント・ピーク。ギャビラン山脈の中の最も高い頂き。ここから裾野に広がる244エーカーは州立公園になっている。頂きからはモンテレイ湾（Monterey Bay）とサリーナス平野（the Salinas Valley）を一望のもとに収めることが出来る。スタインベックは子供の頃，この山へ遊びに来ては，昔のフレモント中隊が残していったといわれる武具などを捜しまわったと言われている。また，スタインベックは，死んだらこの山に埋めてほしいという願望を口にしていた。

晩年の『チャーリーとの旅』（*Travels with Charley*, 1962）の単身旅行でここを訪れたのを最後に，スタインベックは二度とこの地を踏んでいない。以下に，その部分を引用する。

My departure was flight. But I did do one formal and sentimental thing before I turned my back. I drove up to Fremont's Peak, the highest point for many miles around. I climbed the last spiky rocks to the top. Here among these blackened granite outcrops General Frémont made his stand against a Mexican army, and defeated it. When I was a boy we occasionally found cannon balls and rusted bayonets in the area. This solitary stone peak overlooks the whole of my childhood and youth, the great Salinas Valley stretching south for nearly a hundred miles, the town of Salinas where I was born now spreading like crab grass

toward the foothills. Mount Toro, on the brother range to the west, was a rounded benign mountain, and to the north Monterey Bay shone like a blue platter. I felt and smelled and heard the wind blow up from the long valley. It smelled of the brown hills of wild oats.

I remembered how once, in that part of youth that is deeply concerned with death, I wanted to be buried on this peak where without eyes I could see everything I knew and loved, for in those days there was no world beyond the mountains. And I remembered how intensely I felt about my interment. It is strange and perhaps fortunate that when one's time grows nearer one's interest in it flags as death becomes a fact rather than a pageantry. Here on these high rocks my memory myth repaired itself....

（訳）

私の出発は（サリーナスからの）逃亡を意味した。しかし背中を向けるまえに，私はひとつだけ感傷的な儀式を行なった。周囲何マイルにもわたる地域で最も高い地点であるフレモント・ピークへ乗りつけ，最後はくるまを降りて，ごつごつした岩をよじのぼって頂上に到達したのである。この黒ずんだ花こう岩の露出した山の頂きにフレモント将軍はメキシコ軍を相手に陣地を築き，彼らを打ち敗ったのだ。子供の頃私達は時々，この山で砲弾や錆びた銃剣を見つけたものだ。このひとりそびえた岩の頂きは，私の幼年時代・少年時代の全てを見つめ，100マイルにもわたって南に伸びているサリーナスの平野と，今ではこの麓まで芝草のように広がってきた私の生まれたサリーナスの町をみはるかしているのである。フレモント・ピークの西に位置する兄弟峰ともいえる牛山は丸くておだやかな山だったし，北に眼をやればモンテレイ湾が青い大きなお皿のように光っていたものだ。私はこの細長い平野から風が吹きあがってくるのを，肌に感じ耳に聞き，その匂いをかいだのである。その匂いは茶色に広がる野生の燕麦の畠の匂いだった。

私は覚えているのだが，むかし，死ということに深くこだわらざるをえないあの青年時代に，私は，埋葬されるのならこの山の頂きにしてほしいと望んだ

ものだ。(死んで)眼を失ったら，それこそ何も彼も見えてくるだろう，私の知ったもの，愛したものの全てを見ることが出来るだろうからだ。というのはあの時代(の私に)は，この山のほかに世界は無かったからである。自分の埋葬のことを私がどれほど強く気にしているかを私は思い出した。しかし，死期が近付いてくると，死への興味が薄らいでゆくというのは奇妙でもあり，また有り難いことではないのだろうか。死は厳粛な事実であって見世物ではないのだ。この山の頂きに立つと，私の記憶の中の神話が一挙に吹きでてくるのだった。……

フレモント・ピークのことは『エデンの東』(*East of Eden*, 1952) と『たのしい木曜日』(*Sweet Thursday*, 1954) にも出てくる。

Gabilan Mountains: サリーナス平野の東側を画する連山。いちばん高い頂きが Fremont Peak. 標高 3,169 フィート。幼年時代のスタインベックは，『赤い小馬』(*The Red Pony*, 1937) の主人公ジョウディ (Jody) のように，この連山に希望と憧れの気持を寄せていた。『エデンの東』(*East of Eden*, 1952) の第一部，第一章は次のように書き出されている。

The Salinas Valley is in Northern California. It is a long narrow swale between two ranges of mountains, and the Salinas River winds and twists up the center until it falls at last into Monterey Bay.

I remember my childhood names for grasses and secret flowers. I remember where a toad may live and what time the birds awaken in the summer—and what trees and seasons smelled like —how people looked and walked and smelled even. The memory of odors is very rich.

I remember that the Gabilan Mountains to the east of the valley were light gay mountains full of sun and loveliness and a kind of invitation, so that you wanted to climb into their warm

foothills almost as you want to climb into the lap of a beloved mother. They were beckoning mountains with a brown grass love. The Santa Lucias stood up against the sky to the west and kept the valley from the open sea, and they were dark and brooding—unfriendly and dangerous. I always found in myself a dread of west and a love of east. Where I ever got such an idea I cannot say, unless it could be that the morning came over the peaks of the Gabilans and the night drifted back from the ridges of the Santa Lucias. It may be that the birth and death of the day had some part in my feeling about the two ranges of mountains.

（訳）

カリフォルニア北部のサリーナス平野は，ふたつの連山に挟まれた細長い湿地帯で，その中心部をサリーナス川がうねりながら北上し，やがてモンテレイ湾へと注ぎ出ている。

いろいろの草や誰も知らない花に対して子供の頃につけた名前を，私は今でも覚えている。ひきがえるが何処に潜んでいるか，鳥たちが夏には何時に目を醒ますか，また，木々や季節がどんな匂いをしていたか，更には，人々がどんな様子をして，どんな歩きかたをしていたか，また，その人々がどんな匂いを発散していたかまでも，私はよく覚えている。匂いの記憶は鮮烈なものだ。

サリーナス平野の東に位置するギャビラン山脈は，陽光と美しさとある種の誘いに充ちあふれた明るい華やかな山並みで，愛する母親の膝の上に乗りたくなるのと同じ気持ちでその温かい丘陵のふところに登っていきたかったことを私は思い出す。ギャビラン山脈は茶色い草への愛で人を招き寄せる山である。サンタ・ルチア山脈は西の空を背景にしてそびえており，サリーナス平野を海から守っていたが，暗くて陰鬱な感じだったし，親しみがなく危険をはらんでいた。私はいつも自分のなかに西への怖れと東への愛を抱いていた。そんな気持をどうして抱くようになったか私にも分からないが，たぶんそれは，朝がギャビランの頂きを越えて訪れ，夜がサンタ・ルチアの尾根から忍び寄って来たことによるのだろう。あるいはまた，このふたつの山脈についての私の気持の中で，一日の始まりと終わりということが，いくらか関係していたと言えるの

かもしれない。

Madison Square Garden: マディソン・スクウェアー・ガーデン。ニューヨーク市8番街にある屋内総合スポーツ競技場。1879年建設，1890年に第1次改築が行われた。1925年，スタインベックはスタンフォード大学 (Stanford University) を中退し，作家志望の目的を抱き，11月に貨物船カトリーナ号 (the *Katrina*) に乗ってニューヨークへ行き，姉ベス (Elizabeth) と義兄を頼って，当時再改築の始っていたこの競技施設の現場でれんが運びの仕事をしたことがある。また，このニューヨーク滞在中には，『ニューヨーク・アメリカン』 (the *New York American*) 紙の通信員などをしながら，短篇を書いたが成功せず，翌1926年早々，また貨物船に乗り，働きながらパナマ経由で帰郷している。

VI. スタインベック文学基本用語

Non-teleological thinking: 非目的論思考。世界に継起する全ての事象を，それが置かれているままの状況で捉えようとする態度。物事に，原因・結果を求めること，つまり，「なぜ」(“Why”) を問うことを拒否して，物事に付随する可能性，期待感といった夾雑物を極力排除する思考方法。あらゆる価値判断の基準は，「何」(“What”) が「いかに」(“How”) そこに在るかを正確に測定し，理解する以外には無いとする立場。『コルテスの海』(*Sea of Cortez*, 1941) 第14章に詳しく述べられている。ただしこのリケッツとの共著の本文578頁のうち，半分の277頁分に当たる「航海日誌」は，スタインベックが書いたことになっていて，その中で非目的論思考が論じられているのだが，重要な部分はほとんどリケッツの口移しであったことが判明しているの

で注意が必要である。

Non-teleological ideas derive through "is" thinking, associated with natural selection as Darwin seems to have understood it. They imply depth, fundamentalism, and clarity—seeing beyond traditional or personal projections. They consider events as outgrowths and expressions rather than as results; conscious acceptance as a desideratum, and certainly as an all-important prerequisite. Non-teleological thinking concerns itself primarily not with what should be, or could be, or might be, but rather with what actually "is"—attempting at most to answer the already sufficiently difficult questions *what* or *how*, instead of *why*.... Strictly, the term non-teleological thinking ought not to be applied to what we have in mind. Because it involves more than thinking, that term is inadequate. *Modus operandi* might be better—a method of handling data of any sort.

（訳）

非目的論的思想は，ダーウィンが理解していたような自然淘汰と結びついた「存在」の思考から生まれてくるのである。伝統的な，あるいは個人的な枠組みを超えた見方をするのだから，それは，深さ，根本原理，明快さを包含することになる。（原因があって生じる）結果として出来事を見るのではなく，自然の成り行き，または（ただ）そこに現われたものとして出来事を見つめるのである。ひとつの切実な要求として，また絶対に不可欠の必要条件として，進んで受け入れる態度である。非目的論思考は，何よりもまず，現にそこにあるものと係わるのであって，どうあるべきか，どんな可能性があるか，どんな偶然性をもつか，などということとは係わらない。つまり，「なぜ」ではなく，「何が」，「いかに」というそれ自体充分に難しい問題に，精一杯答えようとするものなのである。……厳密に言うと，非目的論思考という言葉は，われわれが頭で思考していることに結びつけるべきではない。思考を超えたものに係わるのだから，非目的論思考という言葉は適切とは言えない。「作業手続き」，す

なわち，どんな種類のものであれ，存在するデータを処理する手段，と言うべきだろう。

Okie(s)：オーキー(ズ)。オクラホマ州の人 (Oklahoman) を軽蔑的に呼ぶ差別語。社会言語学的には，単にオクラホマの農民だけではなく，テキサス中央部，ミズリー南部，アーカンソー西部から，旱魃，砂嵐，害虫などのために農地を失い，1930年代にカリフォルニアに移住してきた30万以上の移住農業労働者たちを，軽蔑的に総称したもの。アーカンソー (Arkansas) からの移住農民を，アーキーズ (Arkies) と言うこともある。

オーキーズ (たち) は，サリーナス平野 (the Salinas Valley) とサン・ウォーキン平野 (the San Joaquin Valley) のはずれのヘブロン台地 (Hebron Heights) に集落を作った。この集落は別名「リトル・オクラホマ」(Little Oklahoma) と言われた。

『怒りのぶどう』(*The Grapes of Wrath*, 1939) は，彼らの苦しみと闘いを，叙事詩的に描いている。

Paisano(s)：パイサノ (メキシコ系アメリカ人。現在ではチカーノ (Chicano) と呼ばれている)。スタインベックは，『トーティヤ台地』(*Tortilla Flat*, 1935) の中で次のように述べている。

What is a paisano? He is a mixture of Spanish, Indian, Mexican and assorted Caucasian bloods. His ancestors have lived in California for a hundred or two years. He speaks English with a paisano accent and Spanish with a paisano accent. When questioned concerning his race, he indignantly claims pure Spanish blood and rolls up his sleeve to show that the soft inside of his arm is nearly white. His color, like that of a well-browned meerschaum pipe, he ascribes to sunburn. He is a paisano, and

he lives in that uphill district above the town of Monterey called Tortilla Flat, although it isn't a flat at all.

（訳）

パイサノとは何者か。スペイン人，インディアン，メキシコ人，それといろんな白人との混血である。100年ないし200年前からカリフォルニアに住んでいる。パイサノ訛りの英語と，これまたパイサノ訛りのスペイン語を話す。人種のことを聞かれると，憤然として純粋スペイン人だと主張して，袖をまくり上げ，腕の内側の柔らかい部分が白いことを見せるのである。そして，よく焼けた海泡石のパイプのような茶色い皮膚は日焼けのせいだと言うのである。これがパイサノで，彼らはモンテレイの町を見おろすあの小高い丘に住んでいて，そこをトーティヤ台地というのだが，実は台地などではまったくないのである。

スタインベックは，７つの作品の中で60人ほどのパイサノを登場させており，その半数近くが『トーティヤ台地』に出てくる。"paisano"は元来スペイン語で「同胞」の意味だが，英語の"peasant"（百姓，田舎者）と同じ意味を持っている。

Play-novelette: プレイ・ノベレット。作品の題材において多様性を示したスタインベックは，その表現形式の面でも多様な試みをしている。そのひとつが，彼自らの命名によるプレイ・ノベレットである。この形式による３番目（そして最後）の試みである『らんらんと燃える』(*Burning Bright*, 1950) の冒頭に，次の記述がある。

Burning Bright is the third attempt I have made to work in this new form—the play-novelette. I don't know that anyone else has ever tried it before. Two of my previous books—*Of Mice and Men* and *The Moon Is Down*—essayed it. In a sense it is a mistake to call it a new form. Rather it is a combination of many old forms. It is a play that is easy to read or a short novel that can be played simply by lifting out the dialogue.

（訳）

『らんらんと燃える』は，この新しい形式――プレイ・ノベレット――での私の3番目の試みである。今までに他の誰かがこの形式を用いたというのは知らない。私の前2作，『はつかねずみと人間』と『月は沈みぬ』で私は試してみた。これを新しい形式と呼ぶのは，ある意味で正しくない。古くからある多くの形式の結合と呼んだほうがよい。つまり，読めるドラマ，ないしは，対話だけを抜き出してすぐ上演出来る短い小説，のことをプレイ・ノベレットというのである。

はっきりとした主張に基づく小説作法としてのプレイ・ノベレットは，非目的論思考（Non-teleological thinking）から必然的に出てくる＜作業手続き＞のひとつだったのである。

"Something That Happened"：「ある出来事が起こった」。『はつかねずみと人間』（*Of Mice and Men*, 1937）完成前の仮りのタイトル。リケッツ（Edward F. Ricketts）の影響を強く受けて，出来事には原因も結果も無く，問題もその解決も無く，英雄も悪漢も無く，ただ，ひとつの出来事がそこに発生したという事実を，非目的論的に（non-teleologically）描こうとする意欲が，この仮りのタイトルに示されている。

この作品が見方によっては，悲劇とも，社会的抗議の作品とも，象徴的作品とも，あるいはアイロニーというように，いろいろな解釈が可能だが，そういう解釈は，ともすると固定化された観念や，形骸化した論理のパターンに現実をはめこんで，人生に妥協的な意味づけをしたり，将来への希望的観測によって現実を見る眼を曇らせたりする怖れがある。だからそれを拒否して，そのような解釈を生み出すもととなっている事実を事実として提示することが，作者の（つまりスタインベックの）思想を表現するための〈作業手続き〉として前提されなければならなかったのである。「ある出来事が起こった」というタイトルは，そのことを如実に示している。

Ⅶ. その他の重要関連事項

Battle Hymn of the Republic: リパブリック讃歌(共和国の戦いの歌)。ニューヨーク生まれの女流詩人ジュリア・ウォード・ハウ (Julia Ward Howe, 1819–1910) が1862年に『アトランティック・マンスリ』(the *Atlantic Monthly*) に発表した歌。「ジョン・ブラウンの亡き骸」("John Brown's Body") の曲に合わせて，南北戦争のとき北軍の間で流行した。

スタインベックの『怒りのぶどう』(*The Grapes of Wrath*, 1939) のタイトルは，この歌の第1節第2行から採ったもの。

Mine eyes have seen the glory of coming of the Lord;
He is trampling out the vintage where the grapes of wrath are stored;
He has loosed the fateful lightning of His terrible swift sword;
His truth is marching on.

I have seen Him in the watch-fires of a hundred circling camps;
They have builded Him an altar in the evening dews and damps;
I can read His righteous sentence by the dim and flaring lamps;
His day is marching on.

I have read a fiery gospel, writ in burnished rows of steel:
"As ye deal with my contemners, so with you my grace shall deal;
Let the Hero, born of woman, crush the serpent with his heel,
Since God is marching on."

He has sounded forth the trumpet that shall never call retreat;

He is sifting out the hearts of men before His judgment seat;
Oh, be swift, my soul, to answer Him! be jubilant, my feet!
Our God is marching on.

In the beauty of the lilies Christ was born across the sea,
With a glory in his bosom that transfigures you and me;
As he died to make men holy, let us die to make men free,
While God is marching on.

（訳）
わがまなこは主の来たる栄光を見たり。
主は怒りのぶどうの貯えられたる畑を踏みて来たり。
主はその恐ろしき素速き刃の運命的一閃を解き放ちたり。
主の真は進み出たり。

われは数多の囲繞せる野営地のかがり火の中に主を見たり。
彼らは夜露の中に主のための祭壇をしつらえたり。
われは微かに燃えるかがり火にて主の正しき詔勅を読むを得たり。
主の統べたもう一日は進み出たり。

われは幾重にも並びたる磨かれし鋼鉄の板に刻まれし熱き福音を読めり。
「汝がわれを蔑む者に対して為すように，われは恩寵を以て汝に対すなり。
女体より生まれた英雄をして，そのかかとにて蛇を砕かしめよ。
神が進み出たるからなり。」

神は退却を知らざるトランペットを吹き鳴らしたり。
神はその裁きの庭に人々の心を引き出せり。
さあ，わが魂よ，急ぎ神に答えよ。わが足よ，喜びて走れ。
わが神は進み出たり。

海の彼方で美しき百合の花に囲まれて，キリストは生まれたり。
その愛の輝きにて汝とわれを高みに導けり。
彼が死して人々を気高くせしように，われらまた死して人々を解き放たん，

神が進み出たる間に。

Dust Bowl: ダスト・ボウル（砂嵐地帯）。1934年から翌年にかけてアメリカ南西部やミシシッピ盆地の平野部を，長期にわたって襲った砂塵によって，農作不能となった旱魃地帯。この地域は，19世紀にも幾度か砂嵐に襲われている。『怒りのぶどう』（*The Grapes of Wrath*, 1939）の第1章から第11章までは，このダスト・ボウルの悲惨さと，それに乗じて農民を食い物にする金融資本の悪辣さを描いている。

Golden Bough, The: 『金枝篇』。スコットランドの古典学者・人類学者フレイザー（James George Frazer, 1854–1941）の著作。1890年に初版刊行（2巻），1936年に全13巻完成。古代人類の土俗信仰・祭祀制度を比較研究し，宗教と呪術の起源およびその進化を明らかにした大著。社会人類学，比較宗教学，民俗学，民族学，神学，心理学，哲学のみならず，世界の文学にも深い影響を与えた。

聖書や『アーサー王物語』（*Le Morte d'Arthur*, 1485），『祭式から物語へ』（Jessie L. Weston, *From Ritual to Romance*, 1920），『母親たち：感情と制度の起源についての一考察』（Robert Briffault, *The Mothers: A Study of the Origins of Sentiments and Institutions*, 1927）と並んで，スタインベックは『金枝篇』を愛読し，多くの作品に援用している。『知られざる神に』（*To a God Unknown*, 1933）と『缶詰横町』（*Cannery Row*, 1945）はその代表的なものと言ってよい。リケッツ（Edward F. Ricketts）は「『金枝篇』はスタインベックが常に使用していた参考書だった」（"Steinbeck's *vade mecum*"）と言っている。

Green Lady", "The: 「緑の女」。ウェブスター・ストリート（Webster F. Street）の未完成に終った3幕物の戯曲。スタインベックが譲り受けて（1927年頃），これを土台にして『知られざる神に』（*To a God Unknown*, 1933）を書いた。

Homestead Act: 自営農地法。西部開拓を促進する目的で1862年に制定された法律。成年者もしくは世帯主が一定の土地に5年間住みついて，農業に従事すれば，その土地（160エーカー）に対する所有権を与えるという法律。『知られざる神に』(*To a God Unknown*, 1933) の主人公ジョゼフ・ウェイン (Joseph Wayne) は，この法律によってカリフォルニア中部のヌエストラ・セニョーラ (Nuestra Senõra) へやって来る。

Hopkins Marine Station: ホプキンズ海洋生物研究所。スタンフォード大学の附属施設。カリフォルニアの鉄道王マーク・ホプキンズ (Mark Hopkins, 1813-78) の養子ティモシー・ホプキンズ (Timothy Hopkins) の寄付により，1892年に設立された太平洋岸最初の海洋生物研究所。パシフィック・グローブ (Pacific Grove) の海浜—キャブリロ岬 (Cabrillo Point)—に位置し，スタインベック家の別荘やリケッツ (Edward F. Ricketts) の太平洋生物学研究所 (Pacific Biological Laboratory) から至近の距離にある。夏学期には，生物学だけでなく一般教養の講義も行われる。スタインベックは1923年の夏学期に，妹メアリ (Mary) と共に在籍した。自然と自然界の営みに対する幼時からの関心が，ここでの経験によっていっそう高まり，生態学 (Ecology) 的なものの見方を身につけ，それが後の全体論 (Holism)，非目的論思考 (Non-teleological thinking)，方陣の理論 (Phalanx) 等スタインベックの思想形成の基礎をつくった。

John Steinbeck Library: ジョン・スタインベック図書館。別名，サリーナス公立図書館 (Salinas Public Library)。カリフォルニア州サリーナス市西サン・ルイス通り110番地 (110 W. San Luis Street, Salinas, CA 93901) に在る。スタインベック関係の文献・資料（作品，評論，新聞記事，テープ，写真，その他）を精力的に蒐集，整理，展示している。1980年以来，毎年8月初旬に催されているスタインベック・フェスティバル (Steinbeck Festival) を主催。1988年現在，館長

ジョン・グロス(John Gross)とポーリン・ピアソン(Pauline Peason), キャシー・ウチヤマ (Cathie Uchiyama) の両女史を中心に，多くの市民が協力して活動を進めている。

Nation The:『ネイション』。アメリカの週刊評論誌。1865年ニューヨークで創刊。初代編集長は Edwin Lawrence Godkin (1831-1902)。一時保守的に傾いた時期もあったが (1909-1914)，ほぼ一貫して自由主義の立場をとっている。

スタインベックは『怒りのぶどう』(*The Grapes of Wrath*, 1939) 創作の準備をしていた時，『ネイション』誌 (1936年9月12日号) に「カリフォルニアの勝敗のわからない戦い」("Dubious Battle in California") を発表し，その中で次のように書いている。

It is fervently to be hoped that the great group of migrant workers so necessary to the harvesting of California's crops may be given the right to live decently, that they may not be so badgered, tormented, and hurt that in the end they become avengers of the hundreds of thousands who have been tormented and starved before them.

(訳)

カリフォルニアの作物を収穫するのに無くてはならない多数の移住労働者にまともな生活をする権利を与えることが強く望まれる。彼らをひどく悩まし，苦しめ，傷つけることによって，彼らの前に苦しめられ，飢えさせられた何十万もの同類の仇を討つような気持に彼らを追い込まないようにすることが，強く望まれる。

New Republic, The:『ニュー・リパブリック』。アメリカの週刊評論誌。1914年創刊。初代編集長は Herbert Croly. 自由主義的立場を堅持している。ウォルター・リップマン (Walter Lippmann, 1889-1974) は

創刊時から編集に携わり，またマルカム・カウリー(Malcolm Cowley, 1898. 8. 24—) は1929年から1940年にかけて文芸欄を担当している。

スタインベックの『月は沈みぬ』(*The Moon Is Down*, 1942) は出版の直後から賛否両論が激しくたたかわされ，『ニュー・リパブリック』誌がその場を提供した。

O. Henry Memorial Award Prize Stories: オー・ヘンリー賞。アメリカの短篇作家オー・ヘンリー（本名ウィリアム・シドニー・ポーター (William Sydney Porter, 1862. 9. 11–1910. 6. 5) を記念して，1919年以来毎年，アメリカの優れた短篇小説に与えられる賞。現在までに1,000編を超える作品が受賞している。スタインベックは次の4つの短篇でその栄に浴している。

「殺人」(“The Murder,” 1934) (1934年)

「約束」(“The Promise,” 1937) (1938年)（この短篇は，のちに『赤い小馬』(*The Red Pony*, 1937) の第3部となる。）

「イーディス・マクギルカディがロバート・ルイ・スティーブンソンに出会った経緯」(“How Edith McGillcuddy Met R. L. S.,” 1941) (1942年)

「M——街7番地の事件」(“The Affair at 7, Rue de M——,” 1955) (1956年)

Pulitzer Prize: ピューリッツァー賞。アメリカの新聞経営者ピューリッツァー (Joseph Pulitzer, 1847–1911) の遺言によって1917年に創設された賞金。文学(詩・小説・演劇・伝記・米国史・ノンフィクション)，音楽，ジャーナリズムの分野で優れた業績をあげたアメリカ人に与えられる。賞金は，当初は500ドルだったが，現在(1968年以降)は1,000ドル。コロンビア大学 (Columbia University) に選定委員会が置かれている。スタインベックは『怒りのぶどう』(*The Grapes of Wrath*,

1939) によって，1940年度の小説部門でこの賞を授与された。

Simon J. Lubin Society of California: カリフォルニア・サイモン・ルービン協会。連邦農業安全保障局 (Farm Security Administration —FSA と略す) の情報部門で働いていたヘレン・フォスマー (Helen Fosmer) が，移住労働者の窮状を見かねて，友人や同僚の援助を得て作った組織。早くからカリフォルニアの移住労働者の側に立って強力な発言を続けていたサイモン J. ルービン (Simon J. Lubin) に因んで彼女が命名した。スタインベックが『ニューズ』紙 (the *San Francisco News*) に7回にわたって連載していた移住労働者の悲惨な生活についてのルポルタージュを1冊にまとめて1938年4月に『彼らの血は強い』(*Their Blood Is Strong*) というパンフレットを出版した。このパンフレットのためにスタインベックが付け加えたエピログ ("Epilogue: Spring 1938") は，『怒りのぶどう』(*The Grapes of Wrath*, 1939) 第25章の原型をなしている。

Steinbeck House: スタインベック・ハウス。サリーナス市中央街132番地 (132 Central Avenue, Salinas)。1897年建築。スタインベックはこの家で生まれ，19歳まで過ごした。1930年代にはこの家で『赤い小馬』(*The Red Pony*, 1937) の一部や，『トーティヤ台地』(*Tortilla Flat*, 1935)，短篇「白いうずら」("The White Quail," 1935)，「菊」("The Chrysanthemums," 1937) などを執筆している。

現在はサリーナスの有志の婦人達によって組織・運営されている慈善団体バリー・ギルド (the Valley Guild) が所有し，予約制の昼食レストラン (Luncheon House) を経営している。また，地下室はベスト・セラー (Best Cellar) と名づけられて，スタインベックの諸作品のほか，彼にゆかりの様々な土産物を展示・販売している。

Stevenson House: スティーブンソン・ハウス。スコットランドの詩人・小説家ロバート・ルイ・スティーブンソン (Robert Louis Stevenson, 1850. 11. 13–1894. 12. 3) が1879年に渡米した時，短期間住んでいた家。

モンテレイ市ヒューストン通り530番地 (530 Houston Street, Monterey)。スタインベックの短篇『イーディス・マクギルカディがロバート・ルイ・スティーブンソンに出会った経緯』(*How Edith McGillcuddy Met R. L. S.*, 1943, 初出は『ハーパーズ・マガジン』(*Harper's Magazine*) の1941年8月号) のラストシーンは，この家が舞台となっている。

スタインベックが幼年時代に愛読した本の中に，『旧約聖書』，『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865)，『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-Glass*, 1871)，キャックストン版『アーサー王物語』(*Le Morte d'Arthur*, 1485) 等と並んで，スティーヴンソンの『宝島』(*Treasure Island*, 1883) があったこと，また，スタインベックがプードル犬チャーリーを連れて，アメリカ横断の単身旅行に出掛けた時の記録『チャーリーとの旅——アメリカをもとめて』(*Travels with Charley in Search of America*, 1962) のタイトルの付け方に，スティーブンソンがロバを連れて，南フランスのセベンヌ山脈地方を単身旅行した時の記録『セベンヌ山脈へのロバとの旅』(*Travels with a Donkey in the Cevennes*, 1879) の影響を読み取ることが出来ること等を考えると，スタインベックのスティーブンソンへの思い入れの深さが感じられる。

Valley Guild: バリー・ギルド。スタインベックの生地サリーナスの有志の婦人達によって組織・運営されている慈善団体。スタインベックの生家 (132 Central Avenue, Salinas) を，スタインベック・ハウス (Steinbeck House) として美しく保存し，予約制の昼食レストラン (Luncheon House) として経営している。また『スタインベック・ハウス料理本』(*The Steinbeck House Cookbook*, 1984) を編集・出版している。

Appendix 1. List of Steinbeck's Major Works
(スタインベック作品リスト)

A. Chronological Checklist (時代順)

Cup of Gold (1929) ……『黄金の杯』
The Pastures of Heaven (1932) ……『天の牧場』
To a God Unknown (1933) ……『知られざる神に』
Tortilla Flat (1935) ……『トーティヤ台地』
In Dubious Battle (1936) ……『勝敗のわからない戦い』
Of Mice and Men (1937) ……『はつかねずみと人間』
Of Mice and Men (Play) (1937) ……『はつかねずみと人間』(戯曲)
The Red Pony (1937) ……『赤い小馬』
The Long Valley (1938) ……『長い平野』
Their Blood Is Strong (1938) ……『彼らの血は強い』
The Grapes of Wrath (1939) ……『怒りのぶどう』
The Forgotten Village (1941) ……『忘れられた村』
Sea of Cortez (1941) (with Ricketts) ……『コルテスの海』(リケッツとの共著)
Bombs Away (1942) ……『爆弾投下』
The Moon Is Down (1942) ……『月は沈みぬ』
The Moon Is Down (Play) (1943) ……『月は沈みぬ』(戯曲)
Cannery Row (1945) ……『缶詰横町』
The Pearl (1947) ……『真珠』
The Wayward Bus (1947) ……『気まぐれバス』
A Russian Journal (1948) ……『ソビエト紀行』
Burning Bright (1950) ……『らんらんと燃える』
Burning Bright (Play) (1951) ……『らんらんと燃える』(戯曲)
The Log from the Sea of Cortez (1951) ……『コルテスの海航海日誌』
East of Eden (1952) ……『エデンの東』
Sweet Thursday (1954) ……『たのしい木曜日』
The Short Reign of Pippin IV (1957) ……『ピピン四世の短い治世』
Once There Was a War (1958) ……『むかし戦争があった』

The Winter of Our Discontent (1961) ……『われらが不満の冬』
Travels with Charley in Search of America (1962)……
『チャーリーとの旅—アメリカを求めて』
America and Americans (1966) ……『アメリカとアメリカ人』
Journal of a Novel (1969) ……『ある小説の記録』
Viva Zapata! (1975) ……『サパタ万歳！』
The Acts of King Arthur and His Noble Knights (1976)……
『アーサー王と高貴な騎士たちの所業』

B. Alphabetical Checklist (アルファベット順)

The Acts of King Arthur and His Noble Knights (1976)……
『アーサー王と高貴な騎士たちの所業』
America and Americans (1966) ……『アメリカとアメリカ人』
Bombs Away (1942)……『爆弾投下』
Burning Bright (1950)……『らんらんと燃える』
Burning Bright (Play) (1951) ……『らんらんと燃える』(戯曲)
Cannery Row (1945)……『缶詰横町』
Cup of Gold (1929) ……『黄金の杯』
East of Eden (1952)……『エデンの東』
The Forgotten Village (1941) ……『忘れられた村』
The Grapes of Wrath (1939) ……『怒りのぶどう』
In Dubious Battle (1936)……『勝敗のわからない戦い』
Journal of a Novel (1969)……『ある小説の記録』
The Log from the Sea of Cortez (1951)……『コルテスの海航海日誌』
The Long Valley (1938)……『長い平野』
The Moon In Down (1942)……『月は沈みぬ』
The Moon Is Down (Play) (1943) ……『月は沈みぬ』(戯曲)
Of Mice and Men (1937) ……『はつかねずみと人間』
Of Mice and Men (Play) (1937)……『はつかねずみと人間』(戯曲)
Once There was a War (1958)……『むかし戦争があった』
The Pastures of Heaven (1932) ……『天の牧場』
The Pearl (1947) ……『真珠』
The Red Pony (1937) ……『赤い小馬』
A Russian Journal (1948) ……『ソビエト紀行』

Sea of Cortez (1941) (with Ricketts) ……『コルテスの海』（リケッツとの共著）
The Short Reign of Pippin IV (1957)……『ピピン四世の短い治世』
Sweet Thursday (1954) ……『たのしい木曜日』
Their Blood Is Strong (1938) ……『彼らの血は強い』
To a God Unknown (1933) ……『知られざる神に』
Tortilla Flat (1935)……『トーティヤ台地』
Travels with Charley in Search of America (1962)……『チャーリーとの旅—アメリカを求めて』
Viva Zapata! (1975) ……『サパタ万歳！』
The Wayward Bus (1947)……『気まぐれバス』
The Winter of Our Discontent (1961) ……『われらが不満の冬』

C. Genre Checklist（ジャンル別）

a) Novels（小説）
Cup of Gold (1929)……『黄金の杯』
The Pastures of Heaven (1932) ……『天の牧場』
To a God Unknown (1933) ……『知られざる神に』
Tortilla Flat (1935)……『トーティヤ台地』
In Dubious Battle (1936)……『勝敗のわからない戦い』
Of Mice and Men (1937) ……『はつかねずみと人間』
The Red Pony (1937) ……『赤い小馬』
The Long Valley (1938)……『長い平野』
The Grapes of Wrath (1939) ……『怒りのぶどう』
The Moon Is Down (1942)……『月は沈みぬ』
Cannery Row (1945)……『缶詰横町』
The Pearl (1947) ……『真珠』
The Wayward Bus (1947)……『気まぐれバス』
Burning Bright (1950)……『らんらんと燃える』
East of Eden (1952) ……『エデンの東』
Sweet Thursday (1954) ……『たのしい木曜日』
The Short Reign of Pippin IV (1957)……『ピピン四世の短い治世』
The Winter of Our Discontent (1961) ……『われらが不満の冬』

b) Non-Fiction (ノンフィクション)

Their Blood Is Strong (1938) ……『彼らの血は強い』
Sea of Cortez (1941) ……『コルテスの海』
Bombs Away (1942)……『爆弾投下』
A Russian Journal (1948) ……『ソビエト紀行』
The Log from the Sea of Cortez (1951)…『コルテスの海航海日誌』
Once There Was a War (1958) ……『むかし戦争があった』
Travels with Charley in Search of America (1962)……
『チャーリーとの旅—アメリカを求めて』
America and Americans (1966) ……『アメリカとアメリカ人』
Journal of a Novel (1969)……『ある小説の記録』

c) Plays (and Filmscripts) (戯曲および台本)

Of Mice and Men (1937) ……『はつかねずみと人間』
The Forgotten Village (1941) ……『忘れられた村』
The Moon Is Down (1943)……『月は沈みぬ』
Burning Bright (1951)……『らんらんと燃える』
Viva Zapata! (1975) ……『サパタ万歳！』

Appendix 2. Key to Abbreviations (略称記号)

AA = *America and Americans* (1966)
AKAHNK= *The Acts of King Arthur and His Noble Knights* (1976)
BA = *Bombs Away* (1942)
BB = *Burning Bright* (1950)
BB. P = *Burning Bright* (Play) (1951)
CG = *Cup of Gold* (1929)
CR = *Cannery Row* (1945)
EE = *East of Eden* (1952)
FV = *The Forgotten Village* (1941)
GW = *The Grapes of Wrath* (1939)
IDB = *In Dubious Battle* (1936)
JN = *Journal of a Novel* (1969)
LSC = *The Log from the Sea of Cortez* (1951)

LV	= *The Long Valley* (1938)
MID	= *The Moon Is Down* (1942)
MID. P	= *The Moon Is Down* (Play) (1943)
OMM	= *Of Mice and Men* (1937)
OMM. P	= *Of Mice and Men* (Play) (1937)
OTWW	= *Once There Was a War* (1958)
P	= *The Pearl* (1947)
PH	= *The Pastures of Heaven* (1932)
RJ	= *A Russian Journal* (1948)
RP	= *The Red Pony* (1937)
SC	= *Sea of Cortez* (1941)
SRP	= *The Short Reign of Pippin IV* (1957)
ST	= *Sweet Thursday* (1954)
TBIS	= *Their Blood Is Strong* (1938)
TCSA	= *Travels with Charley in Search of America* (1962)
TF	= *Tortilla Flat* (1935)
TGU	= *To a God Unknown* (1933)
VZ	= *Viva Zapata!* (1975)
WB	= *The Wayward Bus* (1947)
WOD	= *The Winter of Our Discontent* (1961)

主要参考文献（＊印は特に参照したもの）
（項目別・時代順）

Letters:

＊ Elaine Steinbeck and Robert Wallsten, eds., *Steinbeck: A Life in Letters* (New York: The Viking Press, 1975).

Biographies:

Nelson Valjean, *John Steinbeck: The Errant Knight* (San Francisco: Chronicle Books, 1975).

Thomas Kiernan, *The Intricate Music: A Biography of John Steinbeck* (Boston: Little, Brown and Company, 1979).

Brian St. Pierre, *John Steinbeck: The Californian Years* (San Francisco: Chronicle Books (The Literary West Series), 1983).

＊ Jackson J. Benson, *The True Adventures of John Steinbeck, Writer* (New

York: The Viking Press, 1984).

Bibliographies:

Tetsumaro Hayashi, *John Steinbeck: A Concise Bibliography 1930-65* (Metuchen, N. J.: The Scarecrow Press, 1967).

——————, *A New Steinbeck Bibliography: 1929-1971* (Metuchen, N. J.: The Scarecrow Press, 1973).

* Adrian H. Goldstone and John R. Payne, *John Steinbeck: A Bibliographical Catalogue of the Adrian H. Goldstone Collection* (Austin: Humanities Research Center, 1974).

* John Gross and Lee Richard Hayman, *John Steinbeck: A Guide to the Collection of the Salinas Library* (Salinas, Calif.: Salinas Public Library, 1979).

Tetsumaro Hayashi, *A New Steinbeck Bibliography: 1971-1981* (Metuchen, N. J.: The Scarecrow Press, 1983).

Robert B. Harmon, *A Collector's Guide to the First Edition of John Steinbeck* (Bradenton, Fla.: Opuscula Press, 1985).

——————, *The Collectible John Steinbeck: A Practical Guide* (Jefferson, N. C.: McFarland and Company, 1986).

Complete Works:

Yasuo Hashiguchi, ed., *The Complete Works of John Steinbeck*, 20 vols. (Kyoto: The Rinsen Books, 1985).

Books on, or related to, John Steinbeck:

Edward F. Ricketts and Jack Calvin, *Between Pacific Tides*, revised by Joel W. Hedgpeth (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1939).

Harry Thornton Moore, *The Novels of John Steinbeck: A First Critical Study* (Port Washington, N. Y.: Kennikat Press, 1939).

* E. W. Tedlock, Jr. and C. V. Wicker, eds., *Steinbeck and His Critics: A Record of Twenty-Five Years* (Albuquerque: The University of New Mexico Press, 1957).

* Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck* (New Brunswick, N. J.: Rutgers University Press, 1958).

Warren French, *John Steinbeck* (New York: Twayne Publishers, 1961).

F. W. Watt, *Steinbeck* (Edinburgh: Oliver and Boyd, 1962).

* Joseph Fontenrose, *John Steinbeck: An Introduction and Interpretation* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1963).

* Warren French, ed., *A Companion to The Grapes of Wrath* (New York: The Viking Press, 1963).

* Agnes McNeill Donohue, ed., *A Casebook on The Grapes of Wrath* (New York: Thomas Y. Crowell, 1968).

* Lester Jay Marks, *Thematic Design in the Novels of John Steinbeck* (The Hague: Mouton, 1969).

John C. Pratt, *John Steinbeck* (New Yok: Wm. B. Eerdmans Publishing, 1969).

James Gray, *John Steinbeck* (Minneapolis: The University of Minnesota Press, 1971).

* Richard Astro and Tetsumaro Hayashi, eds., *Steinbeck : The Man and His Work* (Corvallis: Oregon State University Press, 1971).

* Peter Lisca, ed., *John Steibeck, The Grapes of Wrath : Text and Criticism* (New York: The Viking Press, 1972).

Robert Murray Davis, ed., *Steinbeck : A Collection of Critical Essays* (Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall, 1972).

John and Regina Hicks, *Cannery Row : A Pictorial History* (Salinas, Calif. : I and M Enterprises, 1972).

* Richard Astro, *John Steinbeck and Edward F. Ricketts : The Shaping of a Novelist* (Minneapolis: The University of Minnesota Press, 1973).

Tetsumaro Hayashi, ed., *Steinbeck's Literary Dimension : A Guide to Comparative Studies* (Metuchen, N. J. : The Scarecrow Press, 1973).

* Steve Crouch, *Steinbeck Country* (Palo Alto: American West Publishing, 1973).

Tetsumaro Hayashi, ed., *A Study Guide to Steinbeck : A Handbook to His Major Works* (Metuchen, N. J. : The Scarecrow Press, 1974).

* Howard Levant, *The Novels of John Steinbeck : A Critical Study* (Columbia, Mo. : The University of Missouri Press, 1974).

* Tom Weber, *All the Heroes Are Dead : The Ecology of John Steinbeck's Cannery Row* (San Francisco: Ramparts Press, 1974).

* Richard Astro and Joel W. Hedgpeth, eds., *Steinbeck and the Sea* (Corvallis: Oregon State University Press (Oregon State University Sea Grant College Program), 1975).

* Warren French, *John Steinbeck*, 2nd ed. (New York: Twayne Publishers, 1975).

Robert Bennett, *The Wrath of John Steinbeck or St. John Goes to Church* (New York: Haskell House Publishers, 1975).

* Tetsumaro Hayashi, ed., *John Steinbeck: A Dictionary of his Fictional Characters* (Metuchen, N. J.: The Scarecrow Press, 1976).

——————— and Kenneth D. Swan, eds., *Steinbeck's Prophetic Vision of America: Proceedings of the Bicentennial Steinbeck Seminar* (Muncie, Ind.: The John Steinbeck Society of America, 1976).

Lewis Gannett, *John Steinbeck: Personal and Bibliographical Notes* (New York: Haskell House Publishers, 1977).

Anne-Marie Schmitz, *In Search of Steinbeck* (Los Altos, Calif.: Hermes Publications, 1978).

* Thomas Fensch, *Steinbeck and Covici: The Story of Friendship* (Middlebury, Vt.: Paul S. Eriksson, 1979).

* Tetsumaro Hayashi, ed., *A Study Guide to Steinbeck, Part II* (Metuchen, N. J.: The Scarecrow Press, 1979).

B. Ramachandra Rao, *The American Fictional Hero: An Analysis of the Works of Fitzgerald, Wolfe, Farrell, Dos Passos and Steinbeck* (New Delhi: Bahri Publications Private Limited, 1979).

* Donald Worster, *Dust Bowl: The Southern Plains in the 1930s* (New York: Oxford University Press, 1979).

Tetsumaro Hayashi, ed., *Steinbeck and Hemingway: Dissertation Abstracts and Research Opportunities* (Metuchen, N. J.: The Scarecrow Press, 1980).

Paul McCarthy, *John Steinbeck* (New York: Frederick Unger Publishing, 1980).

* Joseph Fontenrose, *Steinbeck's Unhappy Valley: A Study of The Pastures of Heaven* (Berkeley, Calif.: Berkeley, 1981).

Noboru Shimomura, *A Study of John Steinbeck: Mysticism in His Novels* (Tokyo: The Hokuseido Press, 1982).

* Robert DeMott, *Steinbeck's Reading: A Catalogue of Books Owned and Borrowed* (New York: Garland Publishing, 1984).

The Valley Guild, compiled, *The Steinbeck House Cookbook* (Salinas, Calif.: The Valley Guild, 1984).

* Pauline Pearson, compiled, *Guide to Steinbeck Country* (Salinas, Calif.: John Steinbeck Library, 1984).

Robert DeMott, ed., *Your Only Weapon Is Your Work: A Letter by John Steinbeck to Dennis Murphy* (San Jose, Calif.: Steinbeck Research Center, 1985).

Louis Owens, *John Steinbeck's Re-Vision of America* (Athens, Ga.: The University of Georgia Press, 1985).

John Timmerman, *John Steinbeck's Fiction: The Aesthetics of the Road Taken* (Norman, Okla.: The University of Oklahoma Press, 1986).

Mimi Reisel Gladstein, *The Indestructible Woman in Faulkner, Hemingway, and Steinbeck* (Ann Arbor, Mich.: UMI Research Press, 1986).

Keith Ferrell, *John Steinbeck: The Voice of the Land* (New York: M. Evans and Company, 1986).

Tetsumaro Hayashi, *Steinbeck's World War II Fiction, The Moon Is Down: Three Explications* (Muncie, Ind.: The Steinbeck Research Institute (Essay Series, No. 1), 1986).

Tom Mangelsdorf, *A History of Steinbeck's Cannery Row* (Santa Cruz, Calif.: Western Tanager Press, 1986).

Proceedings:

Tetsumaro Hayashi, Yasuo Hashiguchi, and Richard F. Peterson, eds., *John Steinbeck: East and West:* Proceedings of the First International Steinbeck Congress Held at Kyushu University, Fukuoka, Japan in August 1976 (Muncie, Ind.: The Steinbeck Society of America (Steinbeck Monograph Series, No. 8), 1978).

Shigeharu Yano, Tetsumaro Hayashi, Richard F. Peterson, and Yasuo Hashiguchi, eds., *John Steinbeck: From Salinas to the World:* Proceedings of the Second International Steinbeck Congress Held in Salinas, California, U.S.A. in August 1984 (Tokyo: Gaku Shobo Press, 1986).

Portable Editions:

Pascal Covici, ed., *The Portable Steinbeck* (New York: The Viking Press, 1943).

Pascal Covici, Jr., ed., *The Portable Steinbeck*, revised and enlarged (New York: The Viking Press, 1971).

＊アメリカ学会訳編，『原典アメリカ史』全6巻，増刷版（東京；岩波書店，1976）.
西川正身・平井正穂編，『研究社英米文学辞典』，第3版（東京：研究社，1985）.
岩波書店編，『岩波西洋人名辞典』，増補版（東京：岩波書店，1981）.